

資料 2-3-1

ExTEND2005 リスクコミュニケーション関連事業について

1. 背景

化学物質の内分泌かく乱作用は科学的に不明確なことが多く、専門知識を有していない一般市民にとっては、理解しにくい内容を含んでいるため、正確で分かりやすい情報提供が重要である。また、不十分な情報提供が時に混乱を招く可能性もあることから、内分泌かく乱作用も含めた化学物質に関する情報提供やリスクコミュニケーションのあり方・手法等については十分に検討した上で、情報提供を行う必要がある。

これを踏まえ、平成17年度から「化学物質の内分泌かく乱作用に関する環境省の今後の対応方針について」（以下「ExTEND2005」）に基づき、主に一般市民を対象に、化学物質の内分泌かく乱作用に関する正確で分かりやすい情報提供を行うことを目的として、ホームページの作成、身近な野生生物の観察、及び国際シンポジウム開催の3事業を実施した。

2. 取組の概要

平成17年度から21年度までの各事業の取組状況、得られた成果、検討会における指摘事項等の詳細については別添に取りまとめた。リスクコミュニケーション関連事業の取組について、概要は以下のとおり。

1) 身近な野生生物の観察（別添1）

身近な野生生物を観察することにより、野生生物に対する興味の涵養、生物多様性の理解などを得ることを目標に、野生生物の観察を継続的に行っている団体について、専門家から観察方法のアドバイスを受ける観察準備会や各団体による野生生物の観察活動、観察内容の発表会（年一回）を実施している。

2) ホームページ作成（別添2）

主に一般市民を対象に、ホームページ「化学物質の内分泌かく乱作用に関する情報提供サイト」を通じて、化学物質の内分泌かく乱作用に関する正確で分かりやすい情報の提供を行っている。ホームページでは健康・化学物質に関連するニュースの掲載や、化学物質の内分泌かく乱作用に関する、役立つ資料や参考文献等を紹介し、リンクを掲載している。

3) 国際シンポジウム（別添3）

内分泌かく乱作用に関する取組については、平成10年度より諸外国政府、

国際機関等の参加を得た国際シンポジウムを開催しており、ExTEND2005においても引き続き開催した。平成18年度から20年度までは、「小児等の環境保健に関するシンポジウム」と合同で開催した。

身近な野生生物の観察事業について

1. 目的及び内容

本事業は、野生生物を観察することにより、野生生物に対する興味の涵養、生物多様性の理解、生物個体が生存する系の複雑なバランスの理解を得ることを目標としている。また、生物への深い理解を持った上で、化学物質が生態系に与える影響を考えることができる人材を増やしていくことをこの事業の最終的な目的としている。

具体的な内容としては、継続的に野生生物の観察を行っている団体を公募し、観察方法に関して専門家のアドバイスを受ける観察準備会を行い、各団体で野生生物の観察を行う。そして、観察後に提出された報告書から優秀団体を選抜し、発表会を開催している。

2. 実施状況

○平成17年度～19年度

- ・既存のこどもエコクラブの体制を活用し、観察前に専門家及びクラブ代表指導者で観察事業準備会を開催し、本事業内容の検討を行った上で観察を実施した。
- ・観察後に提出されたレポートから、こどもエコクラブ全国フェスティバルへ参加する代表2～3クラブを決定し、同フェスティバルにおいて生き物の展示・解説を行った。

○平成20年度～21年度

- ・野生生物の観察を実施している子どもを中心とする団体を公募した。
- ・参加団体は観察準備会で専門家より観察方法に関するアドバイスを得た後、各自観察を行った。また、団体間の相互交流を図るため、年度末には報告書をもとに10団体を選定して、発表会を実施した。
- ・平成20年度は、観察準備会において専門家より研究の紹介も行われ、発表会終了後には国立環境研究所における最新研究などの見学会も実施した。

3. 検討会における主な意見

○平成17年度

- ・これまで行われてきたエコクラブの活動（既存の活動）と本事業はどう違うのか。
- ・化学物質との関連といった目標をはっきり定めた方がよいのではないか。
- ・ExTEND2005の中で目標をどこに持って行くのか。
- ・関心を持ってもらうこと、継続して行うことが必要である。

○平成19年度

- ・2010年に開催される生物多様性条約締約国会議において、2009年までの観察事業の成果を日本の取組として発信してはどうか。
- ・中国の子どもたちと日本の子どもたちが一緒に観察するといった交流を行ってはどうか。
- ・野生生物の観察事業や国際シンポジウムなど、様々な事業を連携することで、相乗効果を高められるため、連携をより一層努めていただきたい。

○平成20年度

- ・子どもたちが野生生物に親しむということで、この業務は十分責務を果たしていると思う。平成20年度の方向性にあるように化学物質との関連性が必要であれば、それを観察現場に求めるのではなく、観察結果をまとめた報告書から、専門家の方が化学物質との関連性等を読み取って報告すればよいのではないか
- ・化学物質の影響という観点にもう少し特化しつつ、ExTEND2005の他のプロジェクトの成果をうまく反映させながら、この事業を継続させていくということが重要である。
- ・子どもたちが自分たちのフィールドで自主的に楽しく観察をし、自発的な疑問が出てくるということが重要である。こちらから化学物質に着目した観察になるようにと言うのではなく、子ども達から興味が出てきたら助言をしてあげればよいのではないか。

4. 本事業により得られた成果

- ・自然に親しみ、生態系に関する関心・興味を喚起するという基本的な目標は達成されたと考えられる。
- ・平成20年度より、自然に親しむという方針は保持しつつ、普段の観察の中で化学物質の影響を始めとする、環境問題を広く捉えて考察することができるような工夫を試みたところ、概ね期待したとおりの成果が得られた。

5. 今後の課題

- ・本事業には当初、リスクコミュニケーションの推進と野生生物の観察ネットワークづくり（専門家への結果のフィードバック）という2つの目標が含まれていたが、実施された事業は必ずしもその目標に沿ったものになっていなかった。このため、自然に親しむという点にばかり重点が置かれて、同趣旨の他事業（※注1）と区別が明確でないままに事業が継続されてきた。平成20年度からは実施方法に工夫を試みたものの、検討会では依然として本事業には内分泌かく乱作用等、化学物質との関連という観点が不十分である、との指摘がされていることから、活動内容について検討すべきではないか。
- ・また一方で、あえて子どもによる自然観察会の域を出る必要はないとの意見もあることに留意が必要である。

実施状況（平成17年度～平成21年度）

年度	実施内容	周知・広報状況	成果物・公表状況	実施期間 (参加募集～ 事業終了)	参加団体数
H17 ～ H19	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平成17年度は試行的な事業として、既存のこどもエコクラブの体制を活用し、同事務局推薦による全国10クラブに協力を依頼した。観察前に専門家（指導委員）（※注2）及びクラブ代表指導者で野生生物の観察事業準備会を開催し、本事業内容の検討を行った上で観察を実施した。 ○ 平成18年度からは、こどもエコクラブに加盟しているクラブを対象として参加募集を行い、参加団体を選定した。参加団体には専門家より助言が行われた。 ○ 観察後に提出されたレポートから、こどもエコクラブ全国フェスティバルへ参加する代表2～3クラブを決定した。同フェスティバルでは専用のブースを設置し、生き物の展示・解説を行い、身近な野生生物の観察事業紹介パネルや各クラブの観察レポートパネルを展示した。さらに、ゲストスピーカーを招聘し、生態系における生物間の連関をテーマに講演等を実施した。 	<p>—</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 環境省ウェブサイト上にページ作成、及びチラシを作成配布。 ○ 環境省及び事務局ウェブサイトで募集。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観察結果を冊子（業務報告書及び子ども向け報告書）に取りまとめた。 ○ 子供向けについては参加者全員に配布、業務報告書については図書館等において閲覧可能。 	—	10 団体
H20	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもを中心に一般市民の参加を募り、野生生物の観察を実施した。実施期間中、参加団体には専門家より助言が行われた他、団体間の相互交流を図るため、年度末に優秀団体10団体を選定し発表会を開催した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 環境省及び事務局ウェブサイトで募集。 		H18.5.8 ～ H19.3.31	28 団体
H21	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平成20年度からの新たな試みとして、内分泌かく乱作用化学物質との関連という視点から、事前説明会では専門家より研究の紹介を行い、発表会終了後には国立環境研究所における最新研究などの見学会などを実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 環境省及び事務局ウェブサイトで募集。 ○ 野生生物の観察団体などに周知。 		H19.7.24 ～ H20.3.31	28 団体
				H20.6.27 ～ H21.3.31	23 団体
			H21.5.28 ～ H22.3.31	23 団体	

※1 本事業以外に環境省で実施している自然観察の取組

○こどもエコクラブ

幼児から高校生までの2人以上のメンバーと活動を支える1人以上の大人（サポーター）でグループを構成し、生きもの調査、町のエコチェック、リサイクル活動など、身近な環境活動に自由に取り組む。全国の「こどもエコクラブ」の関係者が一堂に会し、各地で展開されている活動報告を行う、「こどもエコクラブ全国フェスティバル」も開催している。

○いきものみつけ

環境省生物多様性センターが平成20年7月から開始した市民参加のいきものしらべ。身近なところで見つけることができるいきものを対象に、それらを見つけた日付や場所、写真などの情報を、ホームページ、携帯電話サイト、郵便・FAXを介して集める。集まった情報は、ホームページ上でリアルタイムに地図上に反映され、調査終了後は集計・解析を行い、種ごとに取りまとめる。

○全国水生生物調査

水生生物を指標として河川の水質を総合的に評価するため、また環境問題への関心を高めるため、環境省と国土交通省で、一般市民等の参加を得て調査を実施している。平成20年度は約7万6千人の参加を得て行われ、全国3,302地点で、河川の水生生物を調査された。夏休み期間を中心として、学校や市民団体の多数の参加が得られている。

※2 指導委員

青山 博昭（残留農薬研究所毒性部副部長兼生殖毒性研究室長）

井口 泰泉（自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授）

斉藤 秀生（自然環境研究センター）

戸田 光彦（自然環境研究センター）

花里 孝幸（信州大学山地水環境教育研究センター）

福井 行雄（広島大学大学院生物圏科学研究科）

安間 繁樹（農学博士、哺乳動物生態学研究者）

化学物質の内分泌かく乱作用に関するホームページについて

1. 目的及び内容

主に一般市民を対象に、化学物質の内分泌かく乱作用に関する正確で分かりやすい情報提供を行うことを目的として、双方向性、継続性、直接性、可変担保の点で優れているホームページを通じて、適切な情報提供を実施している。

2. 実施状況

年度	実施内容	アクセス数
H17	○ 平成 17 年度より化学物質の内分泌かく乱作用に関する情報提供サイトを公開。 ○ 国際シンポジウム開催関連情報の追加掲載、コラムの掲載、アンケート募集ページを開設。	158,816 (H17年7月より)
H18	○ 検討部会の意見を参考に構成、デザイン等をリニューアル。 ○ 国際シンポジウム開催関連情報の追加掲載、コラムの追加掲載	232,133
H19	○ 月毎の関連ニュースを新たに掲載、国際シンポジウム開催関連情報の追加掲載、コラムの追加掲載	170,701
H20	○ 月毎の関連ニュース掲載、国際シンポジウム開催関連情報の追加掲載、コラムの追加掲載、アンケートのリニューアル等を実施。	165,129
H21	○ 月毎の関連ニュース掲載、コラムの追加掲載等を実施予定。	106,134 (~H21年12月)

3. 検討会における主な意見

○平成17年度

- ・化学物質の内分泌かく乱作用に関するホームページについてアクセスの容易さも含めた改良が必要である。
- ・作成主体と環境省の関わりを明確にすべきである。
- ・「環境ホルモン」という言葉が使われていないのは問題ではないか。
- ・出産/育児を行う女性をターゲットにするだけでなく、子どもへの情報発信も重要である

ことからキッズページ等を設ける方がよい。

- ・質問ができるページを設ける方がよい。双方向の意見交換の場として重要である。

○平成18年度

- ・環境省のホームページと民間企業による請負のホームページの2つあってもよいが、環境省の基本的な政策、意見等、大事なことに関しては環境省のホームページで出し、民間企業ホームページで、民間企業のノウハウを活かして環境省の政策、意見等をわかりやすく説明するというスタンスであるべき。
- ・再閲覧の興味を持続させるために、ページの最初のほうに、内分泌かく乱問題に関する何かニュース的なものを、その月単位にでも載せてみてはどうか。

○平成19年度

- ・リスクコミュニケーションは双方向の対話が大切である。ホームページでも、一方通行ではなく、一般市民の方々からご意見をいただき、できるだけそれにきちんと答えていくというような双方向の対応が重要である。
- ・ホームページは環境省の基本的姿勢が反映されているのが分かる形にした方がよい。
- ・ホームページのアクセス状況やアンケートなどの結果を見ていると、10代のアクセスが多いように推測されるので、もう少し中学・高校生用や、小学校高学年用にコンテンツを準備してはどうか。
- ・来年度以降、いわゆる専門的に科学的な事実を重視したコンテンツと、子どもなりが分かりやすいということを重視したホームページという2本立てで考えてみてはどうか。

○平成20年度

- ・アンケートを積極的にもらえるような工夫を検討いただきたい。また、一般の人が気になっている、知りたい情報がみられるように工夫していただきたい。
- ・横断的に、各国の政府がそれぞれの国民のために内分泌かく乱物質について広報しているようなところが一覧できるようなページがあったら非常に役に立つと思う。
- ・「環境省のホームページにおける当該ホームページの位置づけの整理」についてももう少しご説明いただきたい。
- ・リスクコミュニケーションは、一方通行ではなく双方向のコミュニケーションであることが重要だという意見があったと思うが、その意味で、ホームページに相談室を設けるという案は非常に重要である。検討だけに終わらず、ぜひ実現してほしい。

4. 得られた成果等

内分泌かく乱作用に関する諸問題、取組等についての情報提供の一環として、ホームページによる手軽さ、継続性（コンスタントな情報の提供）という特性が生かされており、一定のアクセス数も得られていることから、基本的な目的は果たされている。

5. 本事業の課題

- ・ホームページのタイトル「ED サイト」が、別の意味の検索語と誤解され、必ずしも内分泌かく乱作用に関する情報を求めている者に提供されない可能性があるため、「環境ホルモン」という用語の使用も含め、分かりやすいものを検討する必要があるのではないか。
- ・「公式サイトとは異なる中立的なサイト」という当初の位置付けのもと、コラムでは相反する意見を同時に掲載するなど、あらゆる立場の方が自由な意見を述べられる場として活用できている利点があるものの、作成主体が曖昧であるので、環境省との関係を明確にした方がよいのではないか。
- ・現在、政府ホームページ内のページについては、政府ドメインへの移行が求められているところであり、その状況によっては、内容の修正が必要になるのではないか。
- ・内容について、より分かりやすい情報が求められているが、これまでまとまったユーザーの情報が得られていないため、改善に当たっては、ユーザーとその要望を把握する必要があるのではないか。
- ・現在、ホームページの内容についてネットアンケートを行っているが、現在の方法では回答数を十分に得ることは難しいため、その方法を新たに工夫する必要があるのではないか。

化学物質の環境リスクに関する国際シンポジウムについて

1. 目的及び概要

内分泌かく乱作用に関する取組については、平成10年度より諸外国政府、国際機関等の参加を得た国際シンポジウムを開催している。ExTEND2005においては、リスクコミュニケーションの推進を目的とし、一般市民への分かりやすい情報提供の場として同シンポジウムを引き続き開催した。平成18年度からは、「小児等の環境保健に関するシンポジウム」と合同開催とし、環境リスク全体を対象とするシンポジウムへと転換を図った（平成21年度は開催していない）。

2. 実施状況（詳細は別紙）

○平成17年度（開催地：沖縄県那覇市、参加延べ人数：約530人（3日間））

初日は一般向けプログラム、2・3日目は専門家向けプログラムとし、国内外の最先端の研究・取組についての情報共有・意見交換を行った。一般向けプログラムでは、「今、自然界で何が起きているのか？～内分泌かく乱作用から生態系をどう守っていくのか～」というテーマで、パネルディスカッションが行われた。

○平成18年度（開催地：北海道釧路市、参加延べ人数：約400人（3日間））

「小児等の環境保健に関するシンポジウム」と合同開催とし、シンポジウム名称を「化学物質の環境リスクに関する国際シンポジウム」に変更した。初日は一般向けプログラム、2・3日目は専門家向けプログラムとし、これまでの化学物質の内分泌かく乱作用に加えて、リスク管理のための取組、化学物質の健康リスクに着目した小児の環境保健についても広くテーマとして開催した。一般向けプログラムでは「化学物質とどう付き合い合っていくか～リスクとメリットから考える～」というテーマで、パネルディスカッションが行われた。

○平成19年度（開催地：埼玉県さいたま市、参加のべ人数：851人（2日間））

初日は一般向けプログラム、2日目は専門家向けプログラムとし、化学物質問題全般を幅広く扱い、化学物質のリスク管理のための取り組み、化学物質に由来する健康リスクに着目した小児の環境保健をテーマとした。また、平成19年度は第10回目の節目として、「化学物質の内分泌かく乱作用について～10年間のあゆみ～」をメインテーマとし、10年間の内分泌かく乱作用に関する研究成果等をビデオやスライドを用いて紹介した。

○平成20年度（開催地：東京都江東区、参加のべ人数：約930（2日間））

小児の感受性に着目し、小児を取り巻く環境と健康影響についての紹介をテーマとして開催した。初日は一般向けの基調講演、2日目は専門家向けプログラムとし、小児環境保健に関する取組の紹介等の他、内分泌かく乱に係る取組・今後の展望をテーマとして取り上げた。

3. 検討会における主な意見

○平成17年度

- ・双方向の意見交換の場として重要である。
- ・リスク評価がどのようになっているのかを説明した方がよいのではないか。
- ・シンポジウムの一般向けプログラムと専門家向けプログラムについては何らかの連携を図るべきである。

○平成18年度

- ・リスク管理の専門家で、行政以外の立場で意見をする人が入れば、バランスが取れたと思う。
- ・かなりの額を使ってシンポジウムを開くため、コストパフォーマンスを考えると、もう少し大勢の方が参加しやすいようなところすべき。
- ・コミュニケーションは情報を出す側と受けとめる側の双方向でなければ成り立たない。一方的に環境省の宣伝をする、ということでは、コミュニケーションにならない。
- ・国際シンポジウムのパネル展示においては、様々な環境NGO、あるいは野生生物のネットワークグループの方々も一緒に入っていただけるような仕組みにして欲しい。

○平成19年度

- ・10年の間に、何が分かっている、何がまだ分からないのかということ、をはっきり分かるようにしていただきたい。
- ・野生生物の観察事業や国際シンポジウムなど、様々な事業を連携することで、相乗効果が高められることがあるため、連携により一層努めて欲しい。

○平成20年度

- ・（19年度のシンポジウムは）10年を振り返るということで「日本の歩み」としてよくまとめられており、また、パネル展示も十分行い、一般の参加人数も増えて一応の成果が得られたと思う。
- ・（内分泌かく乱作用については）非常に分かりにくいテーマであり、一般の人はすぐに結論を出しにくい問題であるため、繰り返し伝える努力が必要である。
- ・国際シンポジウムの開催等、リスクコミュニケーションに関する取組はなされているが、まだまだ理解されていない。現在の研究状況がどの程度であるのかというのをシンポジウムでも丁寧に伝えてほしい。

4. 得られた成果

- ・参加者の関心に合わせてプログラムの充実化が図られ、委員の意見を踏まえた周知や運営面でも改善が図られた結果、本シンポジウムが有益な情報提供の場となっていることを示すアンケート結果が得られた。
- ・シンポジウムの開催結果については、マスメディアによる放送や、ホームページ上での動画による情報提供など、開催後にも活用されており、リスクコミュニケーションに役立っている。

5. 本事業の課題

- ・シンポジウムは一方的な情報提供ではなく双方向の情報伝達が重要であるが、本シンポジウムでは専門家による講演が多く、一般市民からの意見を受ける機会が少なかった。
- ・より多くの参加者に情報提供できるよう、周知方法等の工夫を試みてきたが、必ずしも十分な規模の参加者を集めることができなかった。
- ・環境省ホームページ上にシンポジウムの発表資料や動画などを多数掲載されているが、より活用してもらうための工夫が必要である。
- ・現在の予算では、同規模のシンポジウムを開催することは困難であり、今後どのような形で取り組んでいくのか検討が必要である。

実施状況（平成17年度～平成21年度）

年度	実施内容	成果物・公表状況	開催地	実施期間 (開催期間)	参加者数
H17 (第8回)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 初日は一般向けプログラム、2～3日目は専門家向けプログラムとして実施。 ○ 国内外の最先端の研究・取組についての情報共有・意見交換をテーマとし、一般向けプログラムでは、「今、自然界で何が起きているのか？～内分泌かく乱作用から生態系をどう守っていくのか～」というテーマでパネルディスカッションが行われた。 ○ 参加者へアンケート調査を実施。 ○ スタディビジット(沖縄美ら海水族館)。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者に発表要旨集及び小冊子(チビコト)を配布。 ○ 一般向けパネルディスカッションを後日(H18.4.1)NHK教育テレビにて放映。 ○ 環境省HP内の内分泌かく乱関係ページ及びEDサイトにおいて発表要旨集、発表資料、開催結果等を掲載。 	<p>沖縄県那覇市 (沖縄ハーバービューホテル)</p> <p>宜野湾市 (沖縄コンベンションセンター)</p>	H17.12.4～6	<p>12.4(日): 約200人</p> <p>12.5(月): 約160人</p> <p>12.6(火): 約170人</p>
H18 (第9回)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 初日は一般向けプログラム、2～3日目は専門家向けプログラムとして実施。 ○ H18から、「小児等の環境保健に関するシンポジウム」と合同開催とし、シンポジウム名称を「化学物質の環境リスクに関する国際シンポジウム」に変更。これまでの化学物質の内分泌かく乱作用に加えて、リスク管理のための取組、化学物質の健康リスクに着目した小児の環境保健についても広くテーマとした。 ○ 一般向けプログラムでは、「化学物質とどう付き合っていくか～リスクとメリットから考える～」というテーマのもと、パネルディスカッションが行われた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者に発表要旨集を配布。 ○ 一般向けパネルディスカッションを後日(H19.3.31)NHK教育テレビにて放映。 ○ 環境省HP内の内分泌かく乱関係ページ及びEDサイトにおいて発表要旨集、発表資料、開催結果等を掲載。 	<p>北海道釧路市 (釧路市観光国際交流センター)</p>	H18.11.12～14	<p>11.12(日): 約200人</p> <p>11.13(月): 約110人</p> <p>11.14(火): 約90人</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者へアンケート調査を実施。 ○ スタディビジット(釧路湿原)。 				
H19 (第 10 回)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 初日は一般向けプログラム、2 日目は専門家向けプログラムとし、化学物質問題全般を幅広く扱い、化学物質のリスク管理のための取り組み、化学物質に由来する健康リスクに着目した小児の環境保健をテーマとした。 ○ H19 は第 10 回目目の節目として、「化学物質の内分泌かく乱作用について～ 10 年間のあゆみ～」をメインテーマとし、10 年間の内分泌かく乱作用に関する研究成果等をビデオやスライドを用いて紹介した。 ○ 参加者へアンケート調査を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者に発表要旨集及び小児環境保健に関する資料集(資料集は 10 日のみ配布)を配布。 ○ 環境省HP内の内分泌かく乱関係ページ及びEDサイトにおいて発表要旨集、発表資料、開催結果(映像)等を掲載。 	埼玉県さいたま市 (大宮ソニックシティ)	H19. 12. 9～10	12. 9(日) : 472 人 12. 10(月) : 379 人
H20 (第 11 回)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小児の感受性に着目し、小児を取り巻く環境と健康影響をテーマとして実施。 ○ 初日は一般向けの基調講演、2 日目は専門家向けプログラムとし、小児環境保健に関する取組の紹介等の他、内分泌かく乱に係る取組・今後の展望をテーマとして取り上げた。 ○ 参加者へアンケート調査を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者に発表要旨集を配布。 ○ 環境省HP内の内分泌かく乱関係ページ及びEDサイトにおいて発表要旨集、発表資料、開催結果(映像)等を掲載 	東京都江東区 (東京ビッグサイト)	H20. 12. 14 ～ 15	12. 14(日) : 約 380 人 12. 15(月) : 約 550 人
H21	開催なし	—	—	—	—